

新年を迎えて

学校長 鎌田 直純

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い致します。

皆さん素敵な新年を迎えられたことでしょうか。また年末はご家族で楽しいひとときを過ごされたことと思います。私は若い頃、1980年代をパリで過ごしました。そこで少しフランスの年末から新年にかけての様子をご紹介します。

12月になると街の並木の木々はクリスマスのイルミネーションで飾られます。このような景色は最近日本の都会でも普通になっていますが、日本ほど派手ではなく、どちらかと言えば控えめなものでした。冬のヨーロッパは午後4時頃には陽が落ち暗くなります。夕暮時にシャンゼリゼ大通りなどを歩くと並木のイルミネーションが凱旋門まで星の輝きのように続き、また当時は車のヘッドライトも黄色でしたので、周りの景観を壊すことなくそれらが溶け込み、その光景はとても幻想的でした。

24日のクリスマスイヴは、皆家族やごく親しい人と家で祝います。教会のミサに出かける人もいますが、街は静かに更けていきます。そしてクリスマス当日の25日は、店がほとんど閉まり街はひっそりとしています。皆静かに聖誕祭を祝うのです。31日の大晦日は親しい友人達で集まりパーティーをしたりします。真夜中に新年を迎えた瞬間、外では車のクラクションが鳴らされ、シャンパンを開けてにぎやかに祝います。年明けの1月6日はイエス・キリストに詣でる東方の三博士にちなんだ公現祭があります。その祭りではガレット・デ・ロワ（王様のお菓子）というパイを取り分けて食べます。パイの中にはフェーヴ（空豆の意）という陶器の人形が一つだけ入っていて、当たった人はその日王様・女王様になり皆の祝福を受けます。新年のお祭りですが、その日が言わばクリスマスの最後の日で、クリスマスツリーも翌日かたづけられます。

クリスマスの起源はもともとヨーロッパの古層にあった農神祭として行われた冬至のお祭りだったそうです。冬至はその日を境に日が長くなり、太陽の力が復活して、生命の再生を暗示します。古代、聖なる火として燃やした薪は、そのまま受け継がれて《bûche de Noël》すなわちクリスマスイヴに焚く薪となり、フランスではそれを形取ったケーキがクリスマスケーキとなりました。現代まで続くお祭りには、古代からの記憶が色々なところに残っています。



日本も同様で、お正月に飾る門松なども、古来松が生命力の象徴として、繁栄の祈りが込められたものだと言われています。お正月が終われば、本来は神社などで正月飾りと共に燃やしてもらうのが習わしです。何となく《bûche de Noël》と似ていますね。私は昨年11月に奥三河地方を訪れ、様々なお祭りを体験しました。愛知県の東側の山の方です。そこはお祭り街道と言われるほど、昔のお祭りが残っているところです。東栄町という街の広場で、たくさんのお祭りの見所を集めたイベントがありました。11月末から1月上旬まで奥三河の村々で行われる「花祭り」では子どもたちが、ユーモラスな鬼達を相手に踊ったりします。また、少し年上の少年達が、釜のお湯を皆にかけて、悪い霊を追い払い清めてくれました。

人々は昔から自然と共に生き、時には困難な災害に直面する中、暮らしを少しでもよくするために力を合わせて努力し、目に見えない力を信じ、祈り、様々なものを祭ってきました。それは世の東西を問わない人間の知恵です。今まさに、私たちは異なった文化や暮らしにも思いを馳せ、それぞれが尊い心から生まれたものであることを理解し、お互いが寛容な気持ちで共生していく社会を目指したいものです。

本年も、より一層大泉小学校の豊かな発展のため、教員、職員皆で力を尽くして参ります。皆様の本校への教育へのご理解、ご協力を何とぞよろしくお願い致します。